

東日本大震災 学童保育の一日も早い復旧・復興を願って⑦

被災した地域の指導員を支えるための取り組み——全国学童保育指導員学校・東北会場の取り組み

真田 祐

全国学童保育連絡協議会 事務局次長

二〇一一年一〇月二日、全国学童保育連絡協議会（以下、全国連協）主催の全国学童保育指導員学校・東北会場が、仙台市内の宮城学院女子大学で開催され、岩手・宮城・福島被災した地域からも多くの指導員が参加しました。

* * *

被災した地域である東北で開催する今回の指導員学校。自身も被災しながら、学童保育に通う子どもとその家庭を守り、支えるために、日々、一生懸命、働いている指導員をどう支えていくのか——震災後、東北地域の学

童保育連絡協議会が集まり、今回の企画や参加への支援について話し合いました。そして、次の内容で取り組むことになりました。

①被災した地域の指導員の困難に寄り添うためのものとして、子どもの心のケアと指導員自身の心のケアとなる内容にしていくこと（「今、生きることに意味 いのち、記憶、癒し……未来」と題した全体講義／特別講座「震災後の子どもの心のケア、指導員のメンタルケア」を行う。ともに講師は前中央大学教授・DCI日本支部副代表の横

湯園子先生）。

②被災した地域からの特別報告をお願いする。

③被災した地域の指導員の参加費を、全国連協が行っている「東日本大震災学童保育義援金」から援助し、交通費用や交通手段もできるだけ援助する。

そして、学童保育が子どもたちにとってどういう場であるのか、その大切さをあらためて確認できる機会とすること。特に、「毎日の生活の場」として安全で安心して過ごせる生活を子どもたちに保障する学童保育の役割や重要性和、その仕事を担う指導員の役割の大切さを確認する機会にして、被災した地域で子どもたちを守る仕事をしている指導員を支えていきたい考えました。

参加への支援にあたっては、NGO セーブ・ザ・チルドレンジャパンが、岩手県や宮城県からの参加者用のバスを用意してくれました。また、「東日

本大震災学童保育義援金」を活用して、福島県や宮城県からの参加者用のバスも用意することができました。

今回は、被災した地域の市町村に出向き、行政担当者や指導員からもお話をうかがい、どのような支援が必要なのか、被災した方々に寄り添う支援とは何かを確かめながら、参加を呼びかけました。

その中で、どの地域でも、指導員自身が子どもやその家庭を守り支えるためにいっぱいいっぱい状態であること、多くの指導員が、「自分たちの仕事の意味を確かめたい」「指導員同士、語り合いたい、つながり合いたい」という思いを持っていることがわかりました。

福島県内のある町では、これまで、すべての指導員に全国指導員学校への参加費や交通費の保障を行っていません。しかし、今回は予算もなく、交通

手段も奪われているなかで、参加を断念せざるを得ない事態となっていました。が、「東日本大震災学童保育義援金」を活用した参加費と交通費の援助によって、今年も全員、参加していただくことができました。

また、宮城県のある市からは、行政担当者も同行して、市内約八〇名の指導員のうち、約五〇名の参加がありました。

その結果、全体の参加者五三七名のうち、被災した地域から一五〇名を超える指導員が参加されました。

当日の特別報告は、岩手県大船渡市「にこにこ浜っ子クラブ」指導員の久保田涼子さん、宮城県学童保育緊急支援プロジェクトの池川尚美さん、福島県いわき市学童保育連絡協議会事務局長で「久之浜児童クラブ」指導員の鈴木玉江さん、「四倉児童クラブ」指導員の猪狩利江さんにお願いました。

大震災・大津波による大きな被害、放射線に対する不安があるなかでも、子どもの生命と生活を守るために日々、尽力している指導員や保護者、そして連絡協議会の取り組みの報告は、参加者にとって、子どもの生命を守る指導員の仕事の大切さ、学童保育の必要性をあらためて確認する機会となりました。

被災した地域から参加された指導員からは、次のような感想が寄せられています。「私たちの仕事が生かされていることを身をもって感じた三月一日でした」「ここに来て、何もなかった地域との温度差を感じないで研修を受けることができたことがうれしかった」「本当に自分たちは一人じゃないんだと痛感しました」。

これからも、被災した地域の方々に寄り添った支援を息長く続けていきたいと思います。